景教瑣記

藤枝晃

一、景教碑の出土地

いまさら景教碑の出土地の問題などとり上げて論ずるまでもないとは思ふが、それの盩厔出土説を固執する人が今日もなほ跡を絶たず、中にはそれを信ずる人もないではないから、盩厔出土説の起つた由來をはつきりさせておくのもあながち無用の業ではないであらう。

長安出土説、盩厔出土説ともに色々の論據はあるが二次的な傍證を除いた根本のより所は、前者は碑文自體が何ら盩厔に關して述べたものでない點と、長安の義寧坊の大秦寺の故址、あるひはそこに近いと思はれる地點に碑石が立つてゐた事(註)とにあり、後者の説が行はれるに至つたのは偏へに景教碑を最初に目擊した西人な金尼閣 Nicolas Trigault の報告に基づく。直接の論據はこれだけで、他のいろいろな證據はいづれも附加的、間接的な論據ばかりであつて、それの當否はこの問題の決定に影響するところがない。もつとはつきり言へば、例へば盩厔に大秦寺が有つたか無かつたかといふ問題の如き、それが盩厔にあるといふことは景教碑が盩厔に建てられてあつたといふことについて何ら決定的な證據とはならないのである。

では盩厔出土説の據る所の右の金尼閣の報告といふのは、如何なるものかといふと、これは實は彼自身の筆になるものでなく、その死後十年餘りを經て何大化 Ant. de Gouvea の改編する所に係り、金を三人稱で以て呼んだものである。それによると、金尼閣はこれより先、河南、山西の地方に傳道してゐたのであるが一六二五年四月に西安府に教會堂設立の命をうけ、途

中三原縣に於いて約五ケ月間病臥してゐた。（この間に景教碑發見の報が北京に聞えて、教團より金にその調査が命ぜられた —— Havret, La Stèle chrétienne de Si-ngan-fou, IIe Partie, p 58）病癒えて後、漸く西安に至り、そこで始めてこの碑について見たか聞いたかしたのであつて、同報告には次の如くいふ。

その間、この年〔一六二五年〕に首邑〔西安〕から十里離れたCheucheといふ部落で一の石が發見せられた（Interim eodem anno in pago Cheuche decem leucis a metropoli distante lapis repertus est.）、その石には漢字とカルデア文字とが彫つてあつて、之により古くにクリストの法が支那にはいつたことを知る、云々（Havret, La stèle chrétienne, II, p. 69—70 のフランス譯による。括弧内のラテン原文もそれに註記する所）

と。同じ報告書にはその兩三行後にまた碑石出土のことを繰返して述べる。曰く、

その省〔陝西〕のCheuxeといふ部落で、今世紀の二十五年目に、家を建てようと土を掘つたところが人夫たちが高さ八支那尺、幅四尺ばかり、厚さ半尺餘りあつて、一面に漢字のある一個の石を掘りあてた。（Havret, ibid., p. 70）

と。これだけが金尼閣の手記に基づいたといふ何大化の報告の景教碑出土に關する要點のすべてである（念のため斷つておくが、佐伯好郎博士「景教の研究」五八三—八四頁「支那基督教の研究」第一卷—一九六頁に金尼閣の報告としてアヴレより引く所の二句は實はThomos Ignaz Dunyn-Szpotが十八世紀の初めになつて編纂したCollectanea pro historia sinica facta per P. T. I. D. S. S. J. の文であつて、金尼閣のものではない）。この句が傳はり傳はる内に、右のDunyn-Szpotあたりがこれを盩厔と解し西安からの距離を百五十里に改めたりなどして、盩厔出土說がはつきりした形をとる樣になつたのである。だが、右の兩句は果して景教碑の出土地が盩厔であると言つてゐるものと解してよいであらうか。

第一の句について見るに、先づ「十里」といふ距離の點で盩厔にあて難く、次に盩厔ほどの町を村落、部落を意味するpagusなる語で表すことも當を得たことでない（同じ報告書には三原縣については之をvilla

と呼んでゐる由である——Havret, II, p. 71, n. 3.)。なほ、これは餘計な話となるが、かんじんの出土地のCheuche（第二句に於てはCheuxe）なる字も、盩厔（チョウチー）の音を寫したものか否かは問題なしとしない。今日でこそ支那音を寫すのにヱード式のローマ字が幅を利かして、フランス文やドイツ文、又はラテン文の間にまで英語讀みのヱード式ローマ字が用ゐられることが屢々ある（さういふ混亂ぶりは「支那語固有名詞字典」の中に遺憾なく現はれてゐる）。ところが、その頃の宣教師たちのラテン文を見るとchで以てちを寫した例も多いが、同時にさうでない場合もしばしばある。たゞ何大化が如何なる音を寫すためにchの字を使つてゐたかを知る材料を得られず、從つてCheucheが如何なる支那音を寫したかを知るを得ないのを憾みとする。

次に第二の句についていふと、まづ地名がCheuxeとあつて、寫し方が第一の句と異つて居り、距離も示されて居ない。それよりもおかしいのは、一旦碑石の話を終つてまたこゝに繰返して碑石の狀況を述べてゐる點である。さういふ事から、これは何大化が右の報告を編纂するに當り、一の資料に基づいて第一の句を書き、更に別の資料によつて第二の句を書き加へたもので、さうなるとどれだけ金尼閣の手記に依つてゐるのか判らなくなるといふ議論（Drake, Nestorian monasteries of the T'ang Dynasty. *MS.*, II-2, p. 301）さへ起つて來た。

そこまで之を疑ふことは控へて、何大化の報告が西人最初の目擊者なる金尼閣の手記に依れるものとしても、要するにこれより確かに知り得る出土地は、西安の郊外十里ばかりのCheucheあるひはCheuxeと寫され得るやうな名の部落であるといふより以上の結論は出て來ない。

では、その部落は何といふ支那名であつたかといふと、殘念ながら確かなことを云ひ得ない。今日利用し得る十萬分一地圖あたりにはそれと覺しい名が見えない。乾隆「西安府志」卷六〇に引かれた崇聖寺にある明の趙德輝の碑記によると、景教碑の立つてゐた崇聖寺（俗稱金勝寺）の邊りは金勝舖（現代北京音、ヱード式ならばChin-shêng, BEFEO式ならばKin-cheng）あるひは勝金〔鋪〕といふ由である。nとuとは歐文

寫本ではよく誤られるからuをnと讀み、右の金勝の音が訛り傳へられて Chenche あるひは Chenxe の字で寫されたのだらうと無理に推しあてても見たいが、それでは武斷强辨に失するであらうか。

景教碑の立つてゐた地點——すなはち通說では出土地——がまさに大秦寺のあつた長安義寧坊の故址にあたることについては、說を爲すものは次の樣に言ふ。景教碑が盩厔より發掘せられて後に、地方官どもが長安志などを按じて大秦寺の故址を考へ（これは順序が逆であつて、碑石がこゝにあつたことから、後の研究によつて、こゝが義寧坊の址であることが考證せられたのであつて、早くからそれが判つてゐたわけではない）、百五十里の路を盩厔よりはるばる西安まで運び、（長安の市中ではなく）郊外數里のこの荒寺に之を建てたと(Havret, ilid., P. 71 ff. その他)。然りとすれば、誠に御苦勞千萬な話で、明代地方官の有閑かつ物好きなること、まさに世界の驚異に値すると言はねばならないであらう。

（註）桑原博士「考史游記」圖版二四頁を見よ。

二、也里可溫の語源

元代にクリスト教をさして呼んだ「也里可溫」なる言葉——元來はネストル教徒をさしたものといふ——の由來については、我が國では古く大正三年に故坪井九馬三博士によつて、これがアラビア語の Rekhabium に基づくものならんことが提唱せられた（史學雜誌第二十五編十一號「也里可溫に就て」）。それより數ヶ月ならずして發表せられた故田中萃一郎博士の「元朝の官吏登庸法に就いて」なる論文の中で、也里可溫の語源としてドゼリア以來の通說となつてゐるギリシア語の『アルホンが』紹介せられた（史學雜誌二十六編三號二八六頁）。右のうち、ドゼリ說についていふと、蒙古や支那で使はれてゐた言葉を一足とびにギリシア語で說明することは、やはりどうも無理な樣に思はれる。坪井說に至つては、所謂レカブ派なるものはネストル教とも、東方アジアとも關係のない一分派の稱であつて、その名が傳へられたとすることは一層いはれのないことゝ言はねばならぬ。

その後わが國に於いては、この語の語源については別に新說も出されてゐない模樣であり、のみならず通

説のドゼリア説が顧られないで、坪井説が採られてゐる場合すらある（例へば平凡社「東洋歴史大辭典」第一卷）。支那に於いても、陳垣氏の「元也里可溫考」（第三版）には坪井博士の説が支持せられてゐる様に受取られる。最近に出版せられた佐伯好郎博士の「支那基督教の研究」第一卷に何か變つた考へでもあるかと思つて披いたが、この卷は同博士が前に著した大部の著作「景教の研究」の舊を踏襲した條が大部分で、也里可溫についても新見はなく、また其の後學界に提出せられた異説を紹介する所もない。

二三年前に發表せられたNaṣīr al-Dīn Ṭūsī on Finance. By M. Minovi and V. Minorski. (BSOS., X-3, 1940) といふ論文のうち、ミノルスキの擔當した部分の註のうちにこの言葉の語源を論じた一の臆説が提唱せられてゐる。題名の關係でクリスト教史家の注意をひいてゐない様子であり、また右の雜誌もあまり多くは輸入せられてゐないと思ふから左に譯出紹介しておかう。（同論文七八五—六頁）

Arka'ūn（即ち蒙古語が erhe'üu なるを考慮すればär-kä ün）

「クリスト教信者」の義、ジュヴェニの書第三章七七頁には次の如く現はれる、

naṣārā ki ishān-ra arka'ūn mī-khwānaud.

ところが、ラシド・エヂンの書第二章三一三頁には

az naṣārā arkavūnan qasīsan

とあるから、arka'ūu とは更に狭義のもので「クリスト教の僧侶」をさす如く思はれる。支那語の資料に見える所も、同様に狭義のものである。すなはち

Deveria, notes d'épigraphie mongolo-chinoise (JA., 1896, t. viii, 407) には「arkaon（也里可溫）とはある宗教の名である」と言つてゐるけれども、次の箇所になると「クリスト教の僧」と言つてゐる。普通にいはれてゐる此の語の語源はギリシア語の ἀρχών である。ジュヴェニの書第三章三〇一頁のカズキーニーの註にアラビア語の類似語も擧げて、urkūn とは「村長」といふ特定の意味も持つものであり、arkhūn あるひは arkhūl といふと「クリスト教徒の有力者」の義となると言つてゐるのを參照せよ。

ヒヌ・ヤ・マル Marr の "Ark'aun" といふ論文

(Vizantiyskiy vremennik, xii, 1906, pp. 1—68) に於て斬新な假説が提唱せられた。すなはち、マルは、蒙古時代のアルメニア史料に見える ark'aun なる語を、アルメニア語 ark'ai「王」と關係づけた。この語はセム語の「メルク派信者」といふ語を譯すために用ゐられてゐたものであるらしい。マルは、西紀八世紀にはすでにアルメニア人のカルケドン派——中央アジアのメルク派が存したことを指摘し、また十四世紀にはアルメニア人はイシク・クル湖岸に教會堂をもつてゐたことを指摘する。それ故にアルメニア人がこの語を東方に傳へたのであらうといふ。しかし、クリスト教は主としてネストル派によつて中央アジアに傳へられたのであり、クリスト教一般を指す呼び名がメルク派のアルメニア人の如き微々たる團體に由來すると爲すことは、どちらかといふとあり得べきことでない。

蒙古學者はこの erke'ün の語源について何ら滿足すべき考へを出してゐない。(註10) ヴラディーミル ツォフ Vladimirtsov も(疑を存しながら)依然 ἀρχων でもつて説明してゐる。(Zap. Koll. vost., i, 1925, 334)。アラビア語に譯された呼名が、中亞地方には何の痕跡もとゞめずに、しかも東亞に影響を及ぼしたとすることは問題であるけれども、ἀρχων なる語がアラム人クリスト教徒、あるひはマニ教徒によつて傳へられたとする可能性は無視することは出來ない。だが、大切なことは、そのペルシア字音寫(q を以てせず k を以てする)によつてはつきり判るやうに、この語が軟音(口蓋音)系に屬してゐるといふ事實である。(註11) erke'ün なる形(更に古い形にして且恐らく人造語と思はれる形は erkegün)は erke- といふ母音根に接尾語をつけたものなることを思はせる。蒙古語で erke(トルコ語では ärk)とは「力」の義である。トルコ語では ärhä とは「人望家、お氣に入り」の意味であり、ärgä- は「集められる」の義である。この樣にそれらの土地で發生したものとする可能性が決してないではない。ことに、この erke'ün なる語は、ペルシア語の tarsā(シリア語の透寫譯 calque として「クリスト教徒」の義、本來の意味は「畏れる人」)や英語の Quaker の場合の如く、何らかの思ひもよらぬ聯想やつながりから外部の者がつけた綽名であるらしいから。

（註一）原註 Pelliot, T'oung Pao, xv, 1914, p. 637: " l'origine d'ärkägün est beaucoup plus obscure.

（註二）原註 The parallel form with an alif, namely arkavun, is only a scriptio plena, as usual in Turkish and Mongolian words; it must be read ärkävün, not ärkavun.

以上がミノルスキの提出した臆說であるが、臆說はどこまでも臆說であつて、なほ腑に落ちない廉もある。すなはち東方アジアと連絡のないものを以て解かんとするドゼリア說に比べると、これは東方語に基づくとする點で一日の長を認めるけれども、同時にクリスト敎と關係のない語で說明せんとする點は、無條件にはうけいれ兼ねる所である。思ふに、これの解決は中世の中央アジアに於けるクリスト敎の歷史が更に明らかにせられた將來を俟たねばならないものであらう。ミノルスキの考へはさういふ線に沿つてゐる點を買つて宜い。

廣東月令

（鈕琇觚賸）

正月　蜃氣成樓、水仲來賓、荷錢浮於水、二麥黃、木葉微脫、

二月　蔗初芽、蕨拳輸粉、魚苗生、蜺降於霧、木綿吐英、

三月　杜若芳、石蜘揚蒞、江鷗避風、孔雀之尾開金、檳榔包圻、

四月　佛桑紅綻、高榕蔭日、仙掌立、鯊入山蘆化爲虎、樹蘭綴珠、

五月　荔枝丹、菩提舒葉、椰含漿、群蟻朝其祖、鈎割鳴年、

六月　白雨足、西潦至、芭蕉子垂、苦瓜入饌、早禾乃登、

七月　秧針重碧、龍眼熟、蝴蝶營繭、素馨結爲燈、蓏田浮、

八月　颶母息影、茶徙蠅於樹、紙鳶翻風、黃柑分指、河魨乘潮而上、

九月　紅薯登、白欖落、嘉魚出於峽、南燭迎社、香門開、

十月　耕牛放閒、八蠶之功畢、嶺梅芳、橘柚錫貢、銀河夜見、

十一月　桃李花、鷓鴣啟葉、黃雀復爲魚、蜃蜂聚饉、瑞香霏雪、

十二月　蚊不絕吟、池塘竭、稚筍出、風蘭賀春、舊雷有聲。